

## 平成 29 年度第 2 回大船渡市総合教育会議会議録

### 1 日 時

平成 29 年 12 月 8 日（金） 午後 3 時 00 分から午後 4 時 05 分まで

### 2 場 所

大船渡市役所 応接室

### 3 出席者

（構成員） 市長 戸田公明、教育長 小松伸也、教育委員 柏崎正明、教育委員 熊谷テイ子  
（事務局） 副市長 高 泰久、統括監 佐藤高廣、教育次長 志田 努、生涯学習課長 江刺  
雄輝、学校教育課長 市村康之、生涯学習課長総務係長 今野美智恵

### 4 説 明

(1) 新教育委員会制度への移行について

### 5 意見交換

(1) 市内におけるいじめの認知件数等について

(2) 生徒指導上の事案について

(3) その他

### 6 会議の概要

（教育次長）

・ただいまから平成 29 年度第 2 回大船渡市総合教育会議を開会する。開会にあたり、戸田市長からあいさつをお願いする。

（市長）

・12 月のお忙しい中お集まりいただき感謝する。10 月 1 日から新教育制度による新しい教育長を任命した。それに伴い、国の新教育制度を確認する機会にしたい。また、市内のいじめ等に関する調査の報告、生徒指導上の事案について事務局から説明し、教育委員からの意見を賜り、今後の教育行政に生かしていきたいので、忌憚のないご意見を賜りたい。

（教育次長）

・次第 3 説明に入る。(1) 新教育委員会制度への移行について、事務局から説明をお願いする。

（生涯学習課長）

・(1) 新教育委員会制度への移行について、資料に基づき説明する。

（教育次長）

・ただ今の説明について、質問・意見等を求める。

（教育次長）

・特に質問・意見がないことを確認後、次第 4 意見交換に入る。(1) 市内におけるいじめ

の認知件数等について、学校教育課長から説明をお願いします。

(学校教育課長)

- ・(1) 市内におけるいじめの認知件数等について、資料に基づき説明する。

(教育次長)

- ・ただ今の説明について、質問・意見等を求める。

(市長)

- ・いじめ事案が大きくなる背景には、担任が解決できないまま抱え込んでしまい、生徒も苦しむ場合が多い。情報共有はしっかりなされているか。

(学校教育課長)

- ・ご指摘のとおり、抱え込まないことが一番大事である。各学校で「いじめ対策基本方針」を策定し、「いじめ対策組織委員会」を設置し、アンケート調査等を行い、担任だけではなく定期的に情報共有を図っている。

(市長)

- ・職員室内で先生方が遠慮せず言い合える空気が大切である。
- ・「いじめと認知された事案については全て解決済み」とあるが、どのようにして解決済みと判断するのか。

(学校教育課長)

- ・心配される事案について学校から報告を受け、毎月、状況を確認する。

(市長)

- ・生徒同士が手を握り「仲良くしよう」「自分が悪かった」など、職員室や父兄の前で仲直りする機会はあるか。

(学校教育課長)

- ・小学校低・中学年については、いじめた側が謝罪し、それを「許します」など、お互いに意思確認することはある。小学校高学年や中学生については、謝って終わりではなく継続的に観察し、一定期間トラブルがないことを確認して解決したと捉える。

(柏崎委員)

- ・小学校のいじめ認知件数が平成 27 年度と平成 28 年度を比較して 100 件ほど増えているが、学校教育課長から説明があったとおり、いじめの兆候に一早く気付くためには、軽微なものでも積極的にいじめと認知することは良いことだ。
- ・学校は担任による個別面談をとおして、子どもの声が直接先生に届くよう努めている。また、校長先生のリーダーシップのもと、全校朝会など学校教育活動全体をとおして、「いじめは決して許されない」と話し、少しでもいじめらしきものを見つけたら共通理解し、職員一丸となって早期にいじめを無くすよう取り組んでいる。

(熊谷委員)

- ・先生方のコミュニケーションは大切である。職員室で何気なくする会話の中にヒントがある。どの先生もリラックスして話せる雰囲気づくりが必要になってくると思われる。また、「傾聴」良く聞いてあげるといった基本的な姿勢があれば、防止になるのではないか。

(柏崎委員)

- ・震災を体験した子どもたち、県内だけでなく全国から支援をいただいた経験を持つ子どもたちは、いつか、いただいたやさしさをお返しできるような心やさしい人に育ってくれるものと信じている。震災の経験から改めて命の大切さを学んだ被災地の子どもたち

である。その「大切な命をいじめや暴力等で傷つけることは絶対に許されない」と学んだことと強く思っている。

(市長)

- ・いじめを解決していくプロセスの中で、保護者と関ってくる場合もあるだろう。その際は、何気なく発する言葉に注意し、相手方に配慮した言い方があるのではないか。
- ・保護者と学校の先生の関係も人対人であり、コミュニケーションの取り方が大事なのではないか。ざっくばらんの中でも言葉には気をつけることが重要である。

(柏崎委員)

- ・教師の発する言葉に、子どもたちは元気付けられたり、励まされたり、逆に気持ちがシユンとなってしまうことがある。

(教育長)

- ・いじめは全国で 32 万件、岩手県では 5,750 件と数値に表されている。小学校は学級担任制なので、朝から帰りまで 8 時間ほど 1 人の先生と子どもたちが一緒に過ごすので、中学校に比べると見つけやすい。
- ・いじめの認知については、積極的になってきたので、件数は増えていくであろう。
- ・末崎中学校の学校通信に「いじめとは」と題して、生徒会が中心となって「生活向上集会」を開催したことが掲載されている。このように、中学校は学校自ら生徒会主催で「いじめ」について考える会を開催している。

(教育次長)

- ・特に質問・意見がないことを確認後、(2) 生徒指導上の事案について、学校教育課長から説明をお願いする。

(学校教育課長)

- ・(2) 生徒指導上の事案について、資料に基づき説明する。

(教育次長)

- ・ただ今の説明について、質問・意見等を求める。

(市長)

- ・この事案について、クラスの子どもたちは知っているのか。

(学校教育課長)

- ・はい。

(市長)

- ・人間は非常に敏感である。担当が個人面談をした際に、言ってはならないことを言ってしまったのかもしれない。
- ・こういう場合は、担当者ではなくトップが行って頭を下げなければならない。それは校長先生もしくは教育長であろう。それがなく、担当教員に任せてしまっているから保護者は自分の言ったことが重く受け止められていないと感じたのだろう。トップが行けば納得したのではないか。それが人間感情ではないか。
- ・「他校への転出を考えている」というのは、学校や市にとってみれば非常に重い言葉だと思う。この時点でトップが動くべきだった。
- ・児童から保護者が話を聞いてから転校を示唆するまでの約 2 週間、保護者は納得のいかないまま過ごしてきたのではないか。
- ・今後の対応の中に「迅速な連絡体制の徹底」とあるが、具体的に誰と誰の連絡体制のこ

とか。いわゆる「校長先生」と「教育長」の連絡体制のことではないか。

(学校教育課長)

- ・初期段階については、「学校から教育研究所」という体制になっている。

(市長)

- ・今後の対応の中で抜けているのは「トップ同士の連絡と迅速なアクション」である。一番重要なのは「トップがアクションを起こす」ということである。これは相手をそれなりに受け止めるということである。

(教育長)

- ・その判断を誤らないようにするための連絡体制が大事である。学校からの連絡自体が遅かった。複数学年の集会を行った時点で教育委員会へ連絡をすべきだったと考えている。

(市長)

- ・複数学年を集めて話をするという事は、学校にとって大きなことだろうから、この時に連絡があってもよかった。

(教育長)

- ・後手にまわると保護者としても「まだこんなことをしているのか」「もっと早くやってほしかった」と学校との信頼関係が崩れてしまう。そうなると、もうこの学校はダメだと判断し転校ということになる。
- ・市長の指摘のとおり、校長先生の対応が早ければ早いほど保護者は安心する。

(市長)

- ・保護者から連絡があった際、内容については教育長まで報告されていたのか。

(学校教育課長)

- ・されていた。

(市長)

- ・今回のケースでは、教育長の判断がそこで止まってしまった。

(学校教育課長)

- ・上に報告する際、きちんと学校から情報収集してから伝えれば判断は違っていたかもしれない。反省するところである。

(市長)

- ・組織の中で困った時は、問題が起きていることを周囲に声を大にして伝え、分かってもらうことが大切。
- ・学校との連絡は電話か、学校に出向いているか。

(学校教育課長)

- ・通常、学校に出向いて協議するが、この事案については立ち遅れた。

(柏崎委員)

- ・電話だけで済ませようとせず、出向いて話すことが大事である。

(柏崎委員)

- ・昨今の過密スケジュールの中で、担任が子どもたち一人一人と向き合う時間が取れないでいるが、普段から子どもたちとコミュニケーションを図るのが大事である。

(市長)

- ・学校から一方が入った時、教育委員会内でディスカッションしたか。

(学校教育課長)

- ・第一報については情報共有し、様子を見て対応ということになった。ご指摘のとおり、甘いところがあったと認識している。

(市長)

- ・校長先生から連絡があること自体が異常事態なので、そういった時はトップが飛んでいくものである。
- ・今後の対応の改善について、異常時にはトップが動くというのが非常に大事である。

(教育長)

- ・校長会議や生徒指導主事会議等の中で、小さなことでも大事になると思ったらすぐに教育委員会に連絡するよう話している。

(市長)

- ・残念な案件ではあるが、教訓を次に生かしていただきたい。

(教育次長)

- ・(3) その他であるが、全体をとおしてでもよろしいので、みなさんから何かあるか。

(一同)

- ・特になし。

(教育次長)

- ・以上をもって平成 29 年度第 2 回総合教育会議を終了する。